

現場周辺

平成26年度
産業廃棄物不法投棄現場周辺環境モニタリング調査及びデータ解析業務

岐阜市椿洞地内原川 外10か所

調査結果報告書
概要版

平成27年3月

岐阜市 自然共生部 自然環境課

産業廃棄物不法投棄現場周辺モニタリング調査結果総括（平成26年度 年間）

1. 業務の目的

本調査は、岐阜市椿洞地区に不法投棄された産業廃棄物について、周辺の水・土・大気環境に与える特定支障除去事業対策工事後の現場内からの影響を継続的に調査し、それらの異変を速やかに把握すると共に、必要となる対策に資することを目的としたものである。

2. 調査の項目

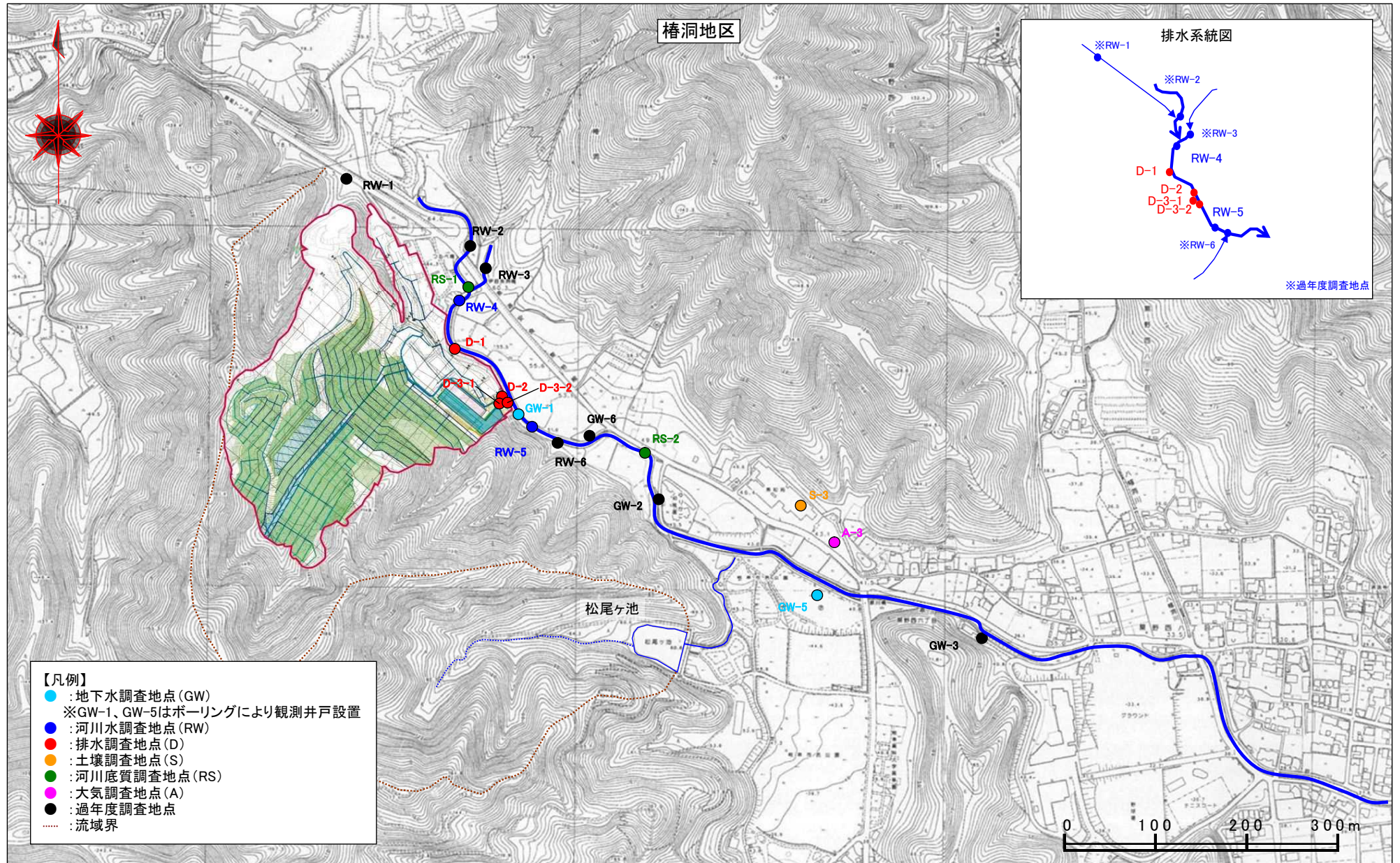
調査対象	調査の目的	評価対象とした基準	調査地点	調査地点の選定理由	
水	地下水	地下水の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	環境基準・河川B類型基準・農業用水基準	観測井戸 GW-1 GW-5	現場からの旧谷筋、原川流域の中央付近(GW-1 -5)を選定する
	河川水	場内排水等による河川水汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	環境基準・河川B類型基準・農業用水基準	原川の上流 RW-4 ・下流 RW-5	現場排水口の原川の上流域、下流域を選定する
	排水	現場排水の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	排水基準（参考値）	場内浸出水 D-1 調整池排水 D-2 D-3	現場から原川に放流される排水口を選定する
	河川底質	現場排水による汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	土壌含有量基準（参考値）	現場排水の原川上流 RS-1 下流 RS-2	現場排水口の原川の上流部と下流部を選定する
土	土壌	粉塵による周辺土壌の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	土壌含有量基準・環境基準	周辺住居 S-3	現場直近の居住地を選定する
大気	ダイオキシン類	汚染物質の飛散拡散状況を把握し、現場内からの影響を確認する	環境基準	周辺住居 A-3	現場直近の居住地を選定する

3. 調査結果の総括

調査対象	基準項目	総括評価	今年度の傾向、今後の課題	備考
地下水	環境基準項目	実施した項目は、全て 地下水環境基準に適合 していた。大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。	これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、イオン組成も大きな変化は見られない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P4～5
	生活環境・監視項目	平成22年から開始された支障除去事業対策工事は平成24年度に完了し、その後も水質濃度に 大きな変化は見られなかった 。不法投棄現場からの有機性汚濁による影響は、地下水のBOD、COD、TOC濃度からは認められない。GW-1の水質変動の要因は、これまでの変動の様子から、降雨による一次的な変動を示すものであり、特に河川水による影響と思われる。		
河川水	環境基準項目	実施した項目は、全て 河川環境基準に適合 していた。大きな水質の変動もなく、問題となる数値は見られない。現場内からの影響は特にないと考えられる。	河川水は、これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、大きな変化は見られない。水質濃度は、RW-4≒RW-5の関係にあり、イオン組成も大きな変動は見られない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P7～8
	生活環境・監視項目	実施した項目からは、直ちに 問題がある数値は認められない 。河川水の水質は、降雨による影響で一時的な変動があるものの、昨年度に引き続き大きな変動は見られない。		
排水	環境基準項目	実施した項目（排水D-3のpHを除く）は、 比較参考とした排水基準に適合 していた。現場内からの影響は特にないと考えられる。	排水D-1は、これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、大きな変化は見られない。排水D-2は、降雨時以外に水量がない。排水D-3は、夏季のpHに基準値超過がみられるが、その原因は水路に付着した藻類の光合成によるものと考えられ、河川への影響は大きくない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P9～10
	生活環境・監視項目	排水は、降雨による場内整形盛土への雨水浸透の影響で、水質濃度に変動が見られるものの、 比較参考とした排水基準に適合 していた。		
河川底質	含有量基準項目	実施した項目は、 比較参考とした土壌汚染対策法の土壌含有量基準に適合 していた。現場内からの周辺への影響は特にないと考えられる。河川底質は、長期における河川の状況を把握するものであるが、排水放流による影響は認められない。	過年度までと同様な数値を示し、変化は認められない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P12
土 壌	含有量基準項目	調査指針値や環境基準値を大きく下回る数値であり、 粉塵降下の影響は認められない 。	過年度までと同様に、調査指針値や環境基準値を大きく下回る数値を継続している。対策工事後も、現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P12
大 気	環境基準項目	ダイオキシン類は、 大気環境基準に適合 していた。現場内からの影響は特にないと考えられる。	過年度までと同様な数値を示し、変化は認められない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今年度は、場内止水壁の推進工が実施されたが、これに伴う周辺環境への影響は、認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P12

◎総合評価： 現場周辺の水、大気、土壌等は、**環境基準に適合**している。支障除去事業における対策工事がH24年度に完了し、H26年度には場内止水壁の推進工が実施されたが、これまでに問題となる周辺への影響は特に認められない。 今後も、**環境への影響を監視**する。

モニタリング調査位置図



1.地下水

■ 環境基準項目

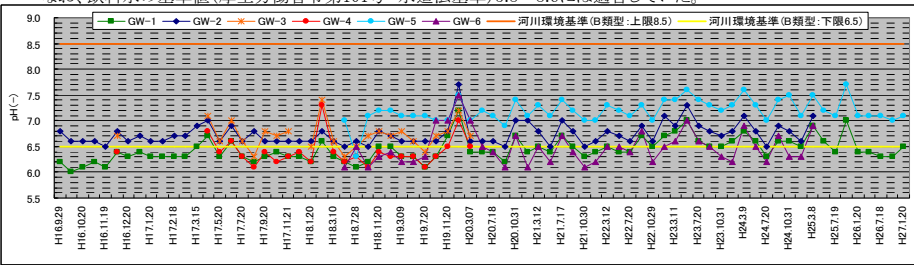
大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。(H26.4.18、H26.7.18、H26.10.20、H27.1.20実施)

■ 生活環境項目

調査を開始した平成16年から、大きな変化は見られない。
 平成20年度後期から実施された支障除去事業による工事中も変化は見られず、工事終了から1年半経過した後も異常は見られていない。
 不法投棄現場からの有機性汚濁による影響は、BOD、COD、TOC等の濃度からは認められない。
 GW-1は、原川河川水の水質パターンに類似している。
 また、観測井戸のGW-5は不法投棄現場から離れた位置となるが、電気伝導率が高めの数値を示す。
 これは原川河川水を介した影響と推測される。

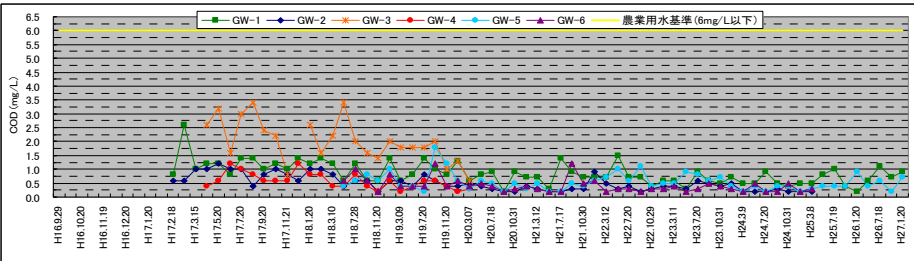
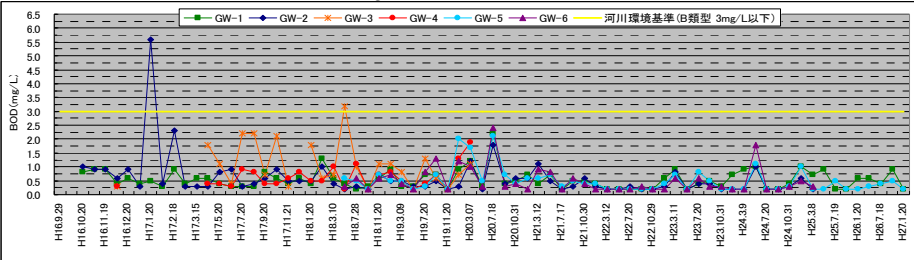
①水素イオン濃度(pH)

pH値は、GW-5では河川B類型の環境基準値に適合していたが、GW-1では弱酸性を示すなど、環境基準値に適合していない月も確認される。これは、河川流量等の周辺環境に起因した変動とみられ、過年度から散見される傾向である。
 なお、飲料水の基準値(厚生労働省令第101号 水道法基準)5.8~8.6には適合していた。



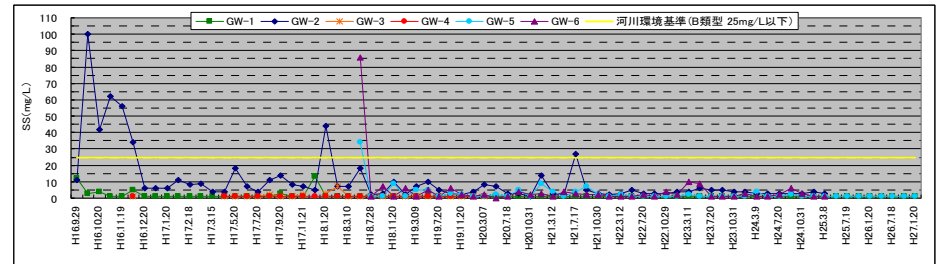
②生物化学的酸素要求量(BOD)、化学的酸素要求量(COD)

BODは、B類型の環境基準値3mg/L以下に適合していた。
 CODは、全ての調査日で農業用水基準値6mg/L以下に適合していた。



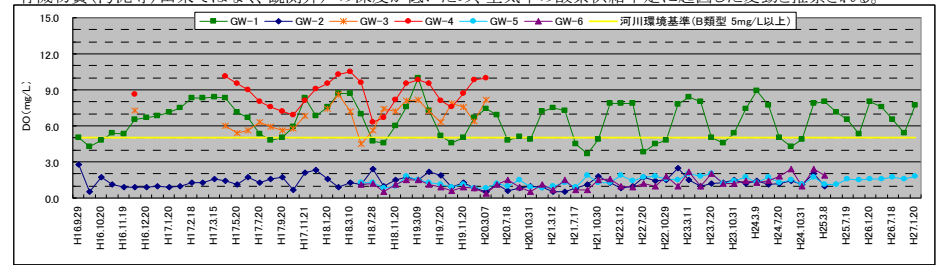
③浮遊物質量(SS)

環境基準値(B類型)25mg/L以下に適合していた。



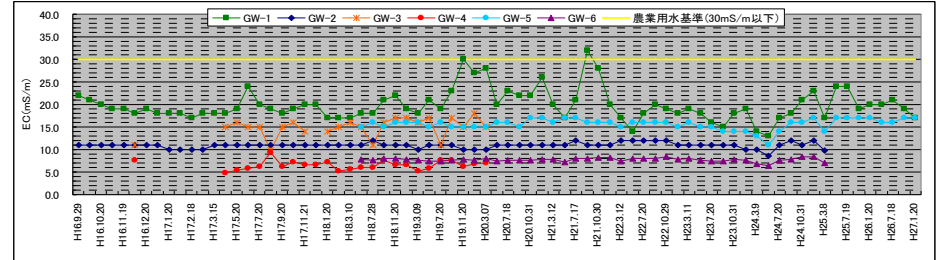
④溶存酸素(DO)

DO値はGW-1地点において、B類型の環境基準値5mg/L以上に適合していた。
 GW-5は、低濃度で推移しているが、BODやアンモニア性窒素の濃度は問題ないことから、廃棄物の有機物(汚泥等)由来ではなく、観測井戸の深度が低いため、空气中の酸素供給不足に起因した変動と推察される。



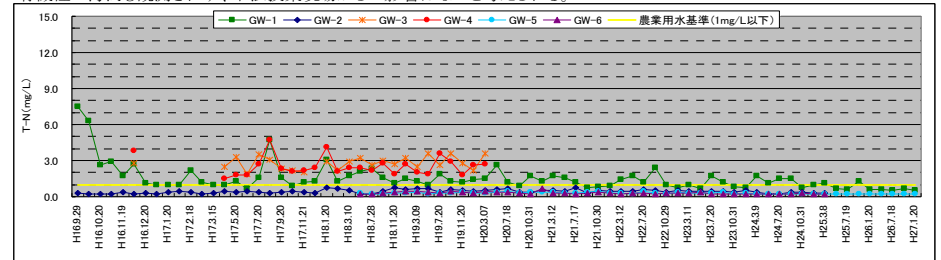
⑤電気伝導率

電気伝導率は、全ての地点にて農業用水基準値30mS/m以下に適合していた。
 地点別には、GW-1が、GW-5よりやや高めの濃度で推移していたが、H26年10月以降は、ほぼ同様の値で推移している。



⑥全窒素(T-N)

昨年度と同様に、各地点とも低い濃度で推移している。
 BOD、COD及びアンモニア性窒素が高い場合は、廃棄物由来の可能性もあるが、各箇所とも全窒素濃度と硝酸性窒素濃度となっており、窒素形態としてはほぼ硝化されていると考えられる。
 有機性の汚濁も観測されず、不法投棄現場からの影響はないと考えられる。



⑦イオン類

下図に、ヘキサダイアグラムとトリニアダイアグラムを示す。(上流⇒下流の順)

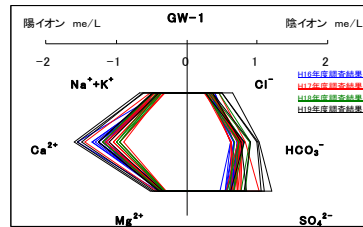
GW-1のイオン成分は、変動幅は経年ごとに小さくなっている。また、水質は調査開始当初は中間型を示していたが、経年ごとに炭酸カルシウム型へと移行している。

GW-1は河川水の水質に酷似しており、河川水の影響を顕著に受ける地点であると考えられるため、河川水の水質変化に起因するものと推察される。

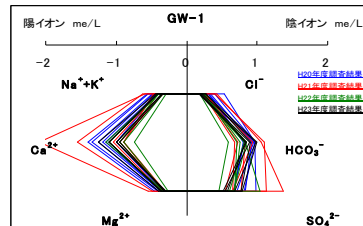
GW-5は、炭酸カルシウム型を示し重碳酸イオンに富んだ型であり変動幅が小さい。

ヘキサダイアグラム

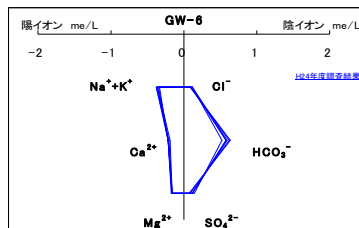
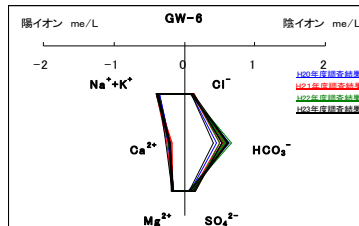
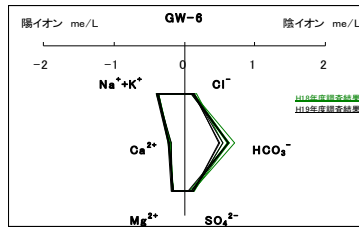
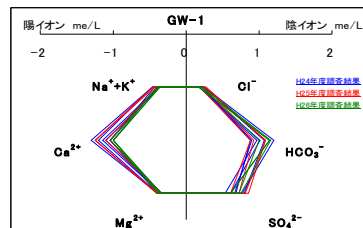
H16~19年度



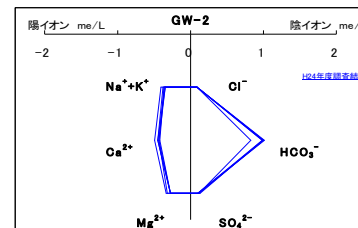
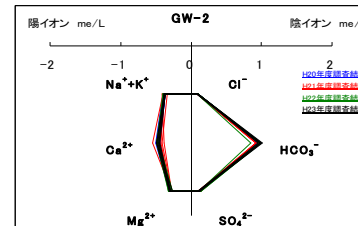
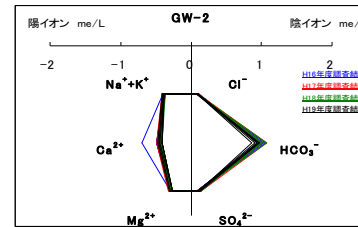
H20~23年度



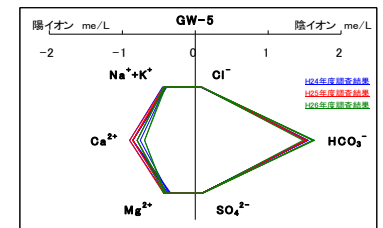
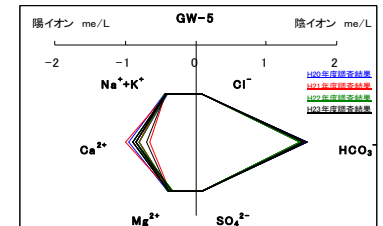
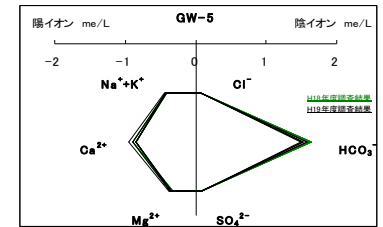
H24~26年度



H25年度よりモニタリング中止

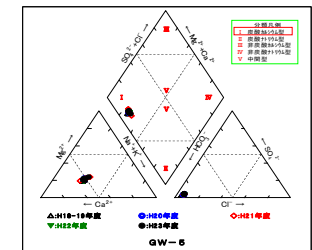
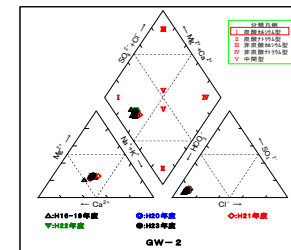
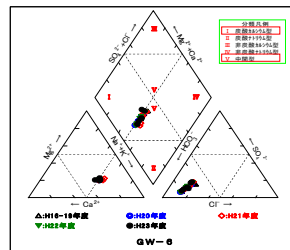
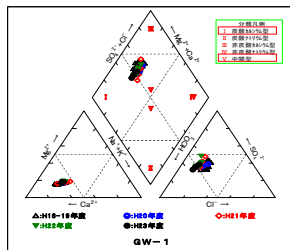


H25年度よりモニタリング中止

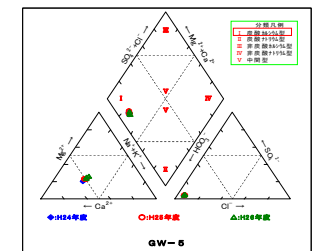
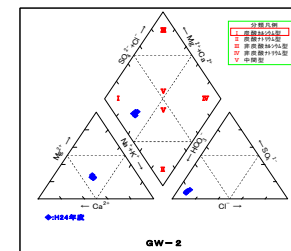
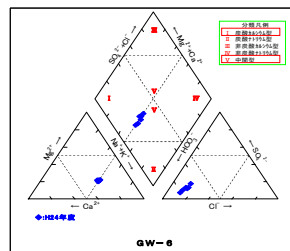
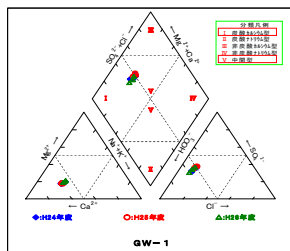


トリニアダイアグラム

H16~23年度



H24~26年度



H25年度よりモニタリング中止

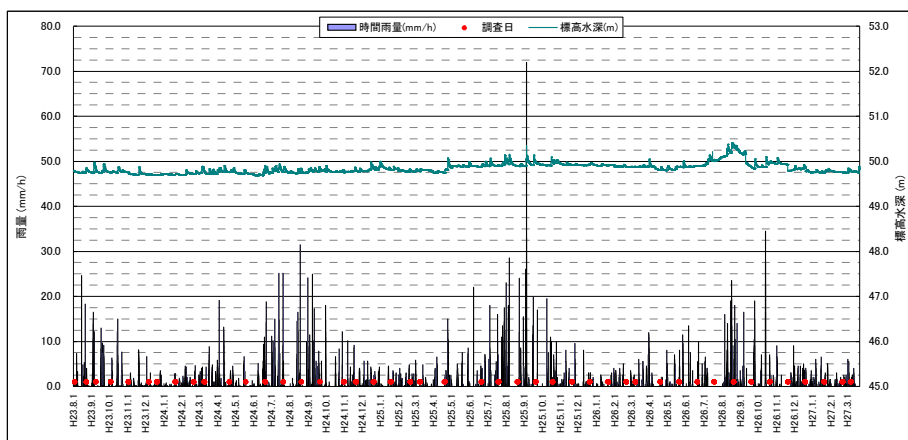
H25年度よりモニタリング中止

地下水の連続観測結果

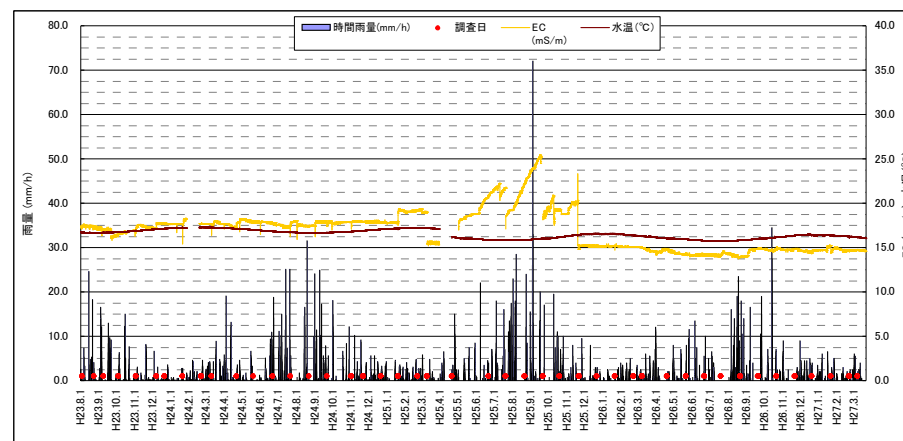
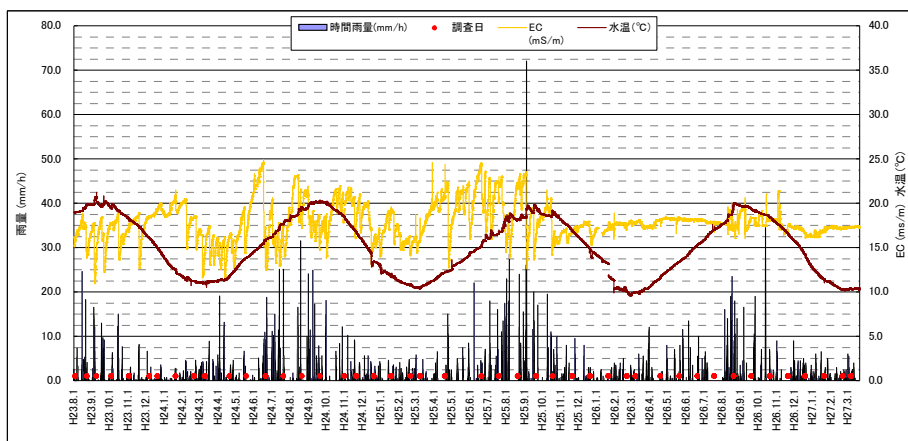
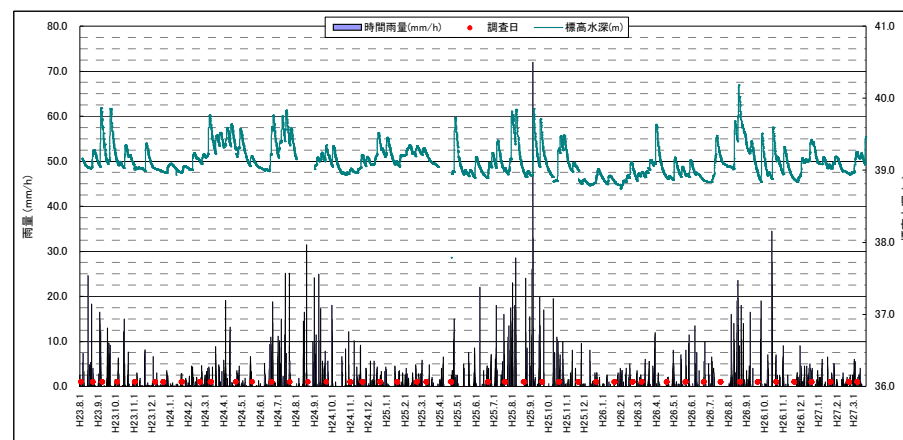
最終データ回収日: H27.3.20

※雨量データ: 場内調査 気象観測データより
(時間雨量 H27.3.16までのデータ)

GW-1



GW-5



◆**地下水水位**
降雨により水位が上昇するが、変動の幅はGW-5に比べて小さい。年間を通じて、大きな変化は認められない。(WL=49.8m前後)
河川水の水位と平衡していると思われる変動幅は小さい。水位の変動は、降雨直後に現れており河川増水時の影響を受けていると考えられる。

◆**水温・電気伝導率**
降雨直後は一時的にEC濃度が低下し、雨水による希釈効果と考えられる。過年度までは、長期間にわたり降雨が無いとEC濃度が上昇し、EC濃度の変動幅は大きく、周辺地下水質の変化ではなく、**外的要因である原川河川水による影響が強い**と思われた。H25年末以降は、EC濃度の変動幅が小さく推移している。これは、この期間の降水量が少なかったことが関係していると考えられた。H26年8月中旬以降は、まとまった降雨が見られ、EC濃度が再び変動し始めている。今後の変動状況に留意する。
なお、GW-1のイオン組成は、H25年度とH26年度において類似しているため、水質には大きな変化は無いと考えられる。
これまでの調査結果から、降雨等による変化はあるものの、経年的な上昇変化は認められない。
水温は、河川水の影響を受けていることや、帯水層が地上に近く、外気温に左右されやすい状態にある。

◆**H26年度の変化**
水位の変動は、これまでと同様な変化を示し、GW-5に比べて変動幅は小さい。
EC濃度が若干変動しているが、降雨による影響と考えられ、経年的な上昇変化は見られない。

◆**地下水水位**
降雨による水位の上昇が鋭敏に現れている。GW-1に比べて水位が小刻みな変動を示す。

◆**水温・電気伝導率**
EC濃度は、これまでの調査結果から大きな変化は認められない。
EC濃度は、低く純粋に地下水の水質を反映していると思われる。
水温は、帯水層が深いため地表外気温の影響を受けず、変動幅は極めて小さい。

◆**H26年度の変化**
降雨による水位変動幅は、これまで同様大きい。
EC濃度は、安定して推移しており、大きな変化はみられない。

2.河川水

■ 環境基準項目

大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。(H26.4.18、H26.7.18、H26.10.20、H27.1.20実施)

■ 生活環境項目

実施した分析項目に、直ちに問題がある数値は認められない。

近年、原川本川における不法投棄現場の上流部RW-4地点と下流部RW-5地点の各項目の濃度は、RW-4≒RW-5の関係が多く、場内排水が流入後の、下流部RW-5での影響はほとんどみられない。

また、H26年8月に場内止水壁の推進工が実施されたが、この工事による周辺環境への影響も見られない。

①水素イオン濃度(pH)

pH値は、2地点全てにおいて、環境基準値(B類型) 6.5～8.5に適合していた。

②生物化学的酸素要求量(BOD)、化学的酸素要求量(COD)

BOD値は、2地点全てにおいて環境基準値(B類型) 3mg/L以下に適合していた。

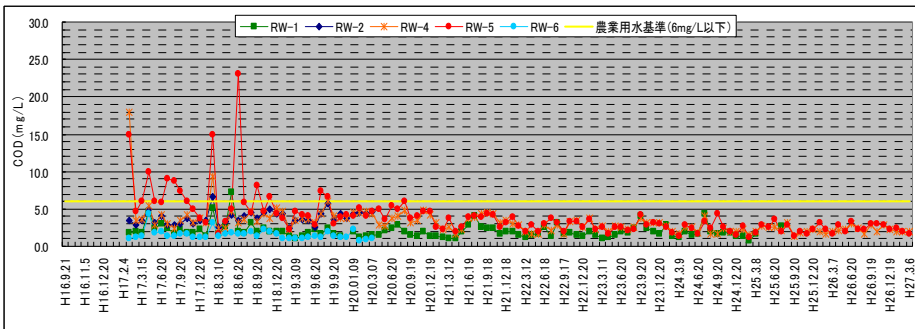
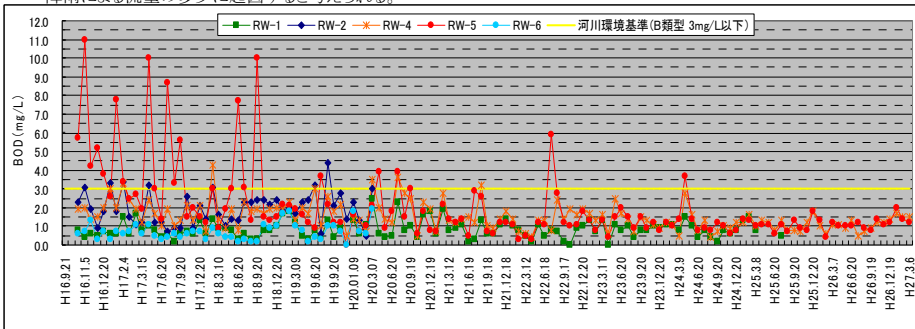
COD値は、2地点全てにおいて、農業用水基準値6mg/L以下に適合していた。

原川本川は、BOD、CODがRW-4<RW-5の濃度関係となる状況が、過年度から散見される。

H21年度以前は、RW-4とRW-5との間で流入する排水D-1、2に起因して濃度が変動していたと考えられる。

H21年度以降は、RW-4とRW-5の濃度の差が小さくなり、濃度の変動幅も安定している。

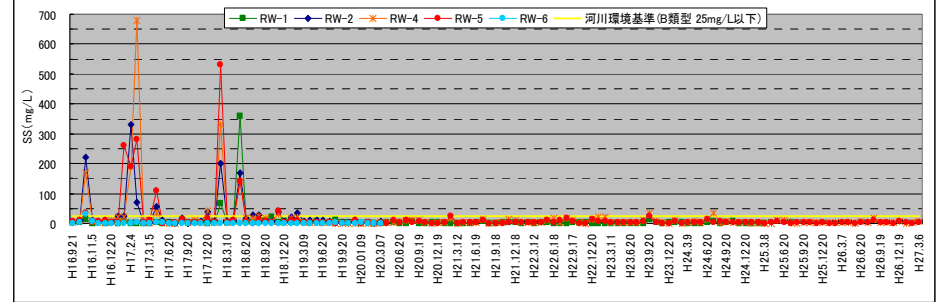
H24年度に場内における対策工事は終了している。よって、H24年度以降の濃度の変動は排水に起因するものではなく、降雨による流量の多少に起因すると考えられる。



③浮遊物質質量(SS)

環境基準値(B類型)の25mg/L以下に概ね適合していた。

H26年度は、概ねRW-4>RW-5の濃度関係にあり、場内からの排水の影響は少ないと考えられる。



④溶存酸素(DO)

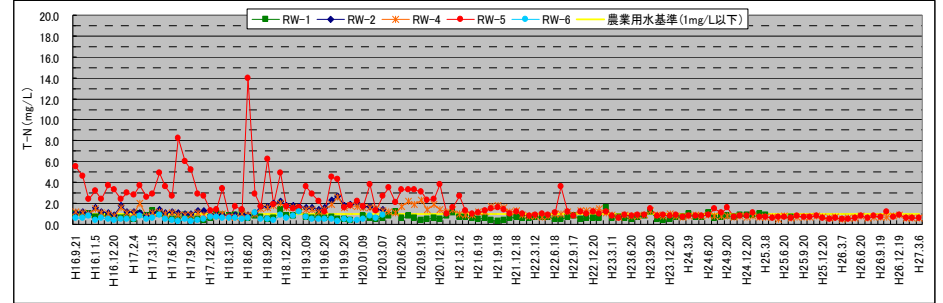
DO値は2地点全てにおいて、環境基準値(B類型) 5mg/L以上に適合していた。

⑤全窒素(T-N)

原川本川は、T-N濃度がRW-4<RW-5の濃度関係となる状況が、過年度から散見される。

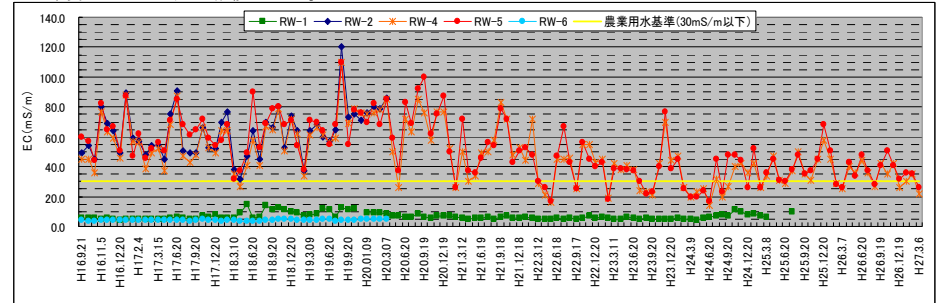
これはRW-4地点とRW-5地点間に、T-N濃度が高い排水D-1、2が流入していることに起因しているものであった。

平成21年度以降は、RW-4≒RW-5の濃度関係にあり、場内排水の影響はあまり見られない。



⑥電気伝導率

原川本川であるRW-4、RW-5は、H21年度以前は20～120mS/mで推移していたが、H21年度以降はばらつきが比較的安定し、H26年度は22～51mS/mで推移している。



⑦イオン類

下図に、ヘキサダイアグラムとトリニアダイアグラムを示す。(上流⇒下流の順)

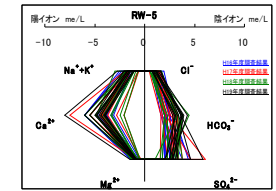
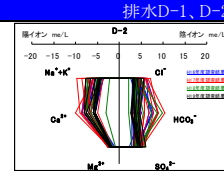
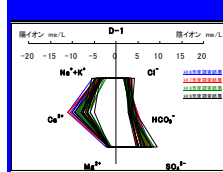
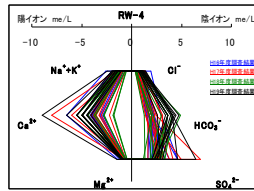
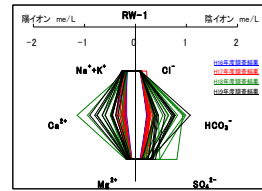
原川上流部RW-4では、これまで排水D-1、2の合流前から既にカルシウム、硫酸イオンに富んだ型を示していたが、硫酸イオンの溶出はH21年度から抑制されている。

RW-4、5のイオン成分の変動幅は、経年ごとに小さくなってきている。

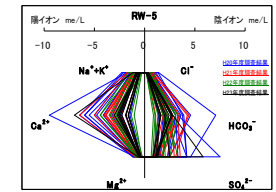
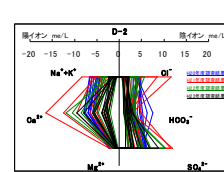
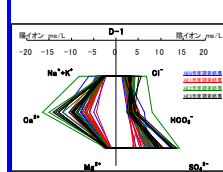
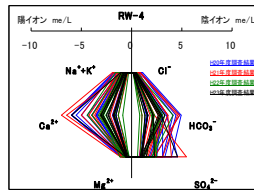
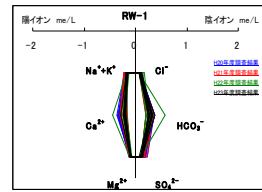
RW-4、5のイオン成分は、非炭酸カルシウム、中間型であったものが、経年ごとに炭酸カルシウム型へ移行しており、原川上流部におけるなんらかの環境変化により水質が変化しているものと推察される。

ヘキサダイアグラム

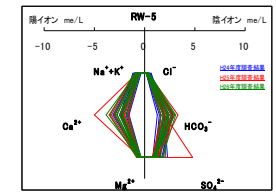
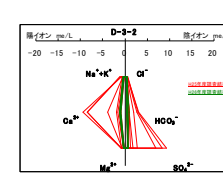
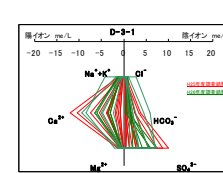
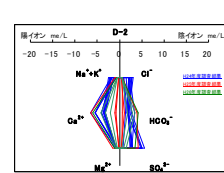
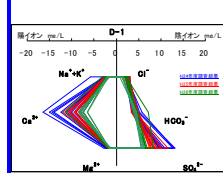
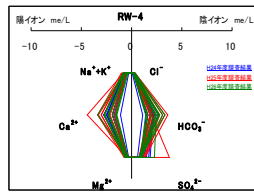
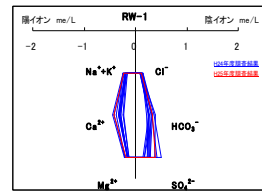
H16~19年度



H20~23年度

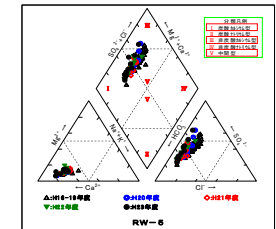
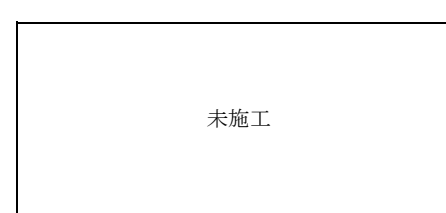
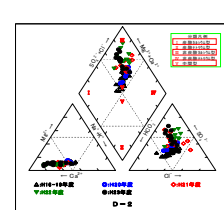
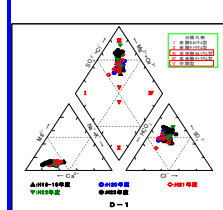
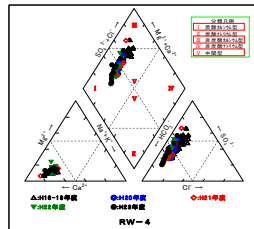
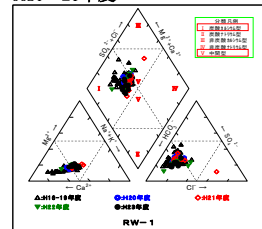


H24~26年度

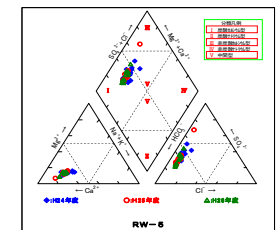
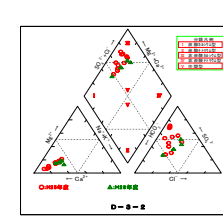
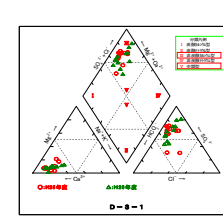
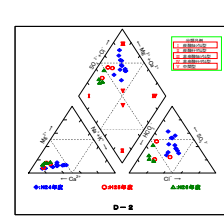
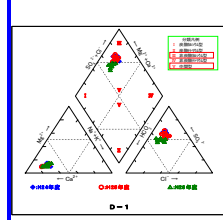
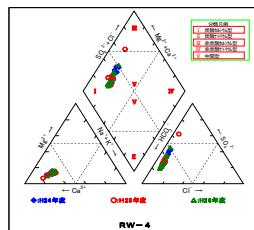
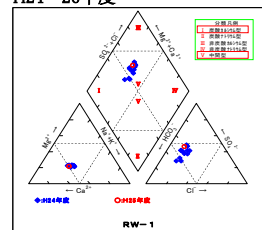


トリニアダイアグラム

H16~23年度



H24~26年度



3.排水

■ 環境基準項目

実施した項目は、比較参考とした排水基準に全て適合していた。(H26.4.18、H26.7.18実施)

■ 生活環境項目

実施した項目は、pH以外はすべて比較参考としている排水基準に適合していた。

H24年度の対策工完了に伴う、場内の排水系統の変更により、これまで流出が確認できていたD-2においては降雨時以外の流量が確認できなくなった。なお、H25.5.20の試料はD-2上流に位置する既設調整池から溜まり水を採水していることから水質に変化がみられる。

排水D-3-1、D-3-2は、降雨状況によって流量が大きく変化し、それに伴い分析結果にばらつきがみられる。

また、排水D-3-1、D-3-2は、H26年4月～7月にかけて、pH、BOD、COD等に変動が見られた。

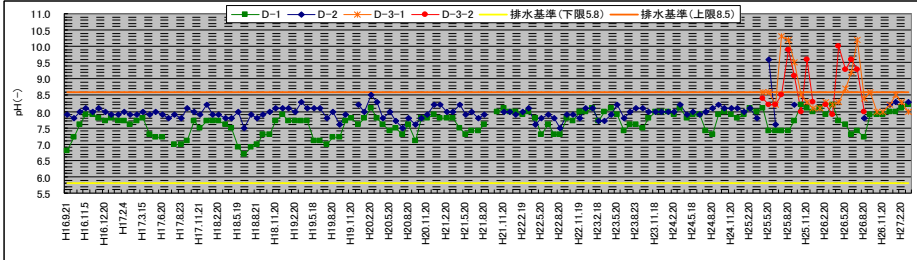
これは、水路内の藻類による光合成や、植物由来の有機物の溶出によるものと考えられ、その後の濃度に上昇傾向は見られないことから、植物の生育旺盛な高温期特有の現象と考えられる。

また、H26年8月に場内止水壁の推進工が実施されたが、この工事による周辺環境への影響も見られない。

①水素イオン濃度(pH)

pH値はD-3-1、D-3-2の4～7月に、排水基準値5.8～8.6の範囲を超過した。

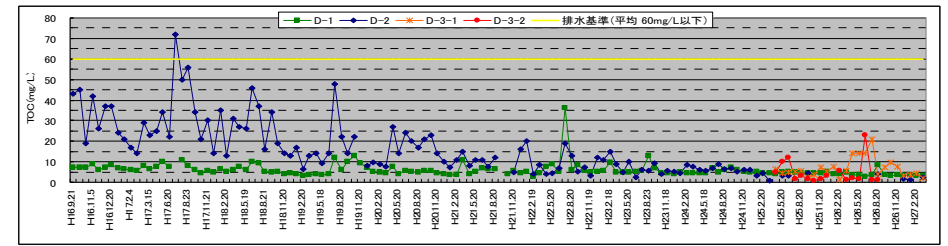
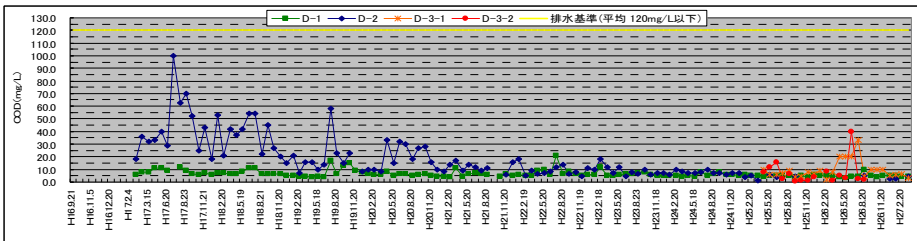
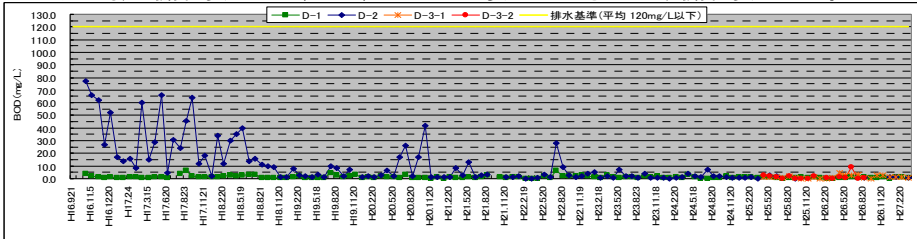
超過した要因は、昨年度と同様に水路内部に藻類が繁茂していたことから、附着藻類の光合成による影響と推定される。



②生物化学的酸素要求量(BOD)、化学的酸素要求量(COD)、有機体炭素(TOC)

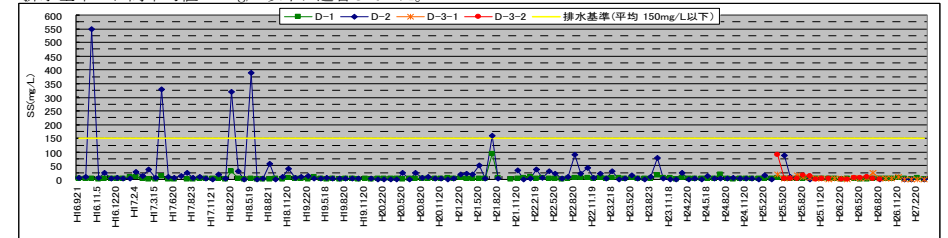
BOD、CODは、排水基準の日間平均値120mg/L以下に、TOCは排水基準の日間平均値60mg/L以下に適合していた。

これまでも低い濃度で安定しており、D-3-1、D-3-2において多少のばらつきがあるが低濃度で安定している。



③浮遊物質質量(SS)

排水基準の日間平均値150mg/L以下に適合していた。



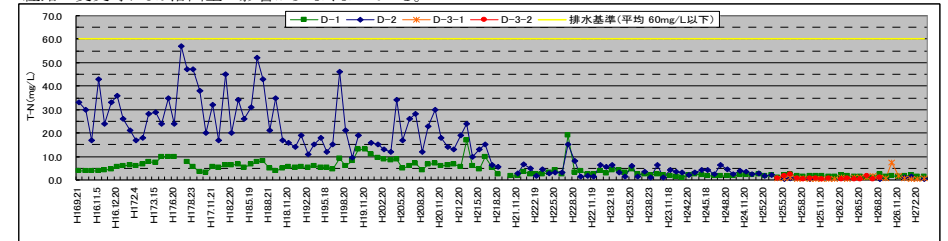
④全クロム(T-Cr)

すべての調査日において定量下限値未満であった。排水基準値2mg/L以下に適合していた。

⑤全窒素(T-N)

全ての調査日において、排水基準の日間平均値60mg/L以下に適合していた。

H21年6月までD-2の排水については生産活動がなされていない事業場としては、全窒素濃度が高く検出されていたが近年は低い濃度で安定している。要因としては、埋設された廃棄物からの溶出影響が考えられていたが、除去や排水経路の変更等により溶出量の影響が少なくなっている。



⑥電気伝導率

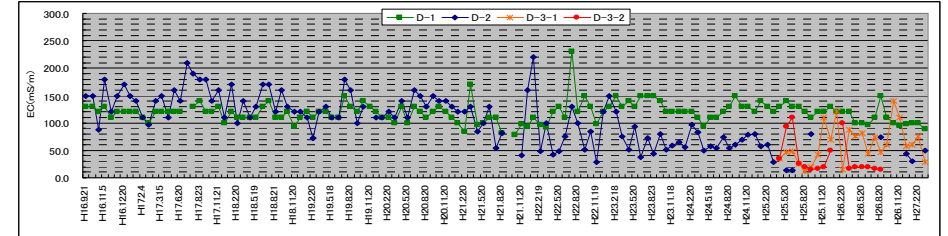
地点別では、D-1に比べて、D-2が高めの濃度を示していたが、H21年6月以降は排水経路及び新設調整池の設置等により、変動傾向は大きく変わっている。

D-1は、H22年度以降は高めの濃度で推移していたが、本年度は若干の低下傾向が見られる。

D-2は、H21年度以降は低めの濃度で推移しているが、降雨状況に起因し、

沈砂池及び既設調整池への場内表面水の流入状況により濃度が大きく変動する。

D-3-1は、29～140mS/mの間で変動し、ばらつきがみられる。D-3-2は、H26年9月以降は流水が確認されていない。



⑦イオン類

イオン組成は、中間型～非炭酸カルシウム型(炭酸カルシウム型)で推移している。

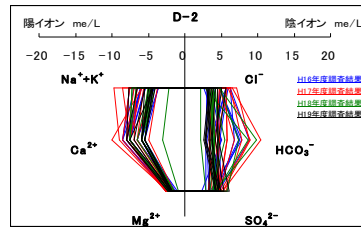
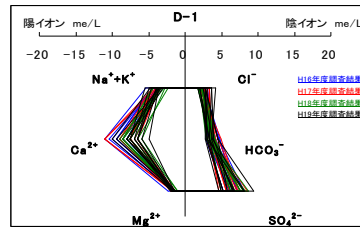
D-1は、調査開始以降、カルシウム、硫酸イオン濃度が上昇し、水質パターンは中間型から非炭酸型へと移行している。H24年度以降は、カルシウム、硫酸イオン濃度は低下傾向にあり、H26年度は概ね中間型を示している。

D-2では、過年度から、降雨による表面水及び土砂の流入や、廃棄物層からの浸透水の影響を受け安定していなかったが、H23年度以降は、変動幅は小さくなり、H25年度以降は降雨時以外は流水が見られない。

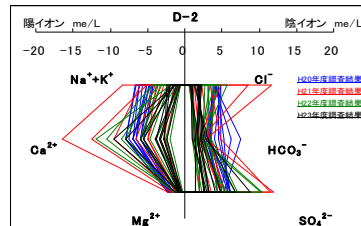
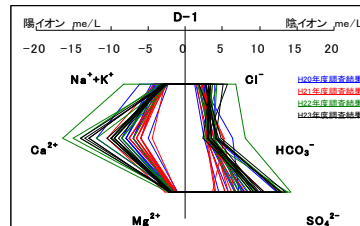
D-3-1、D-3-2は、各イオン成分とも低濃度で検出されている。

ヘキサダイアグラム

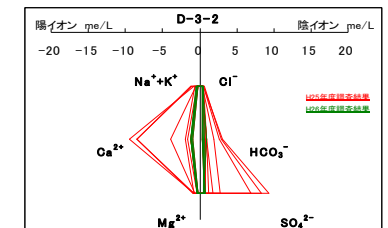
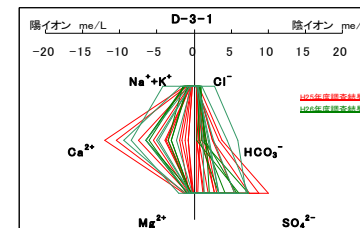
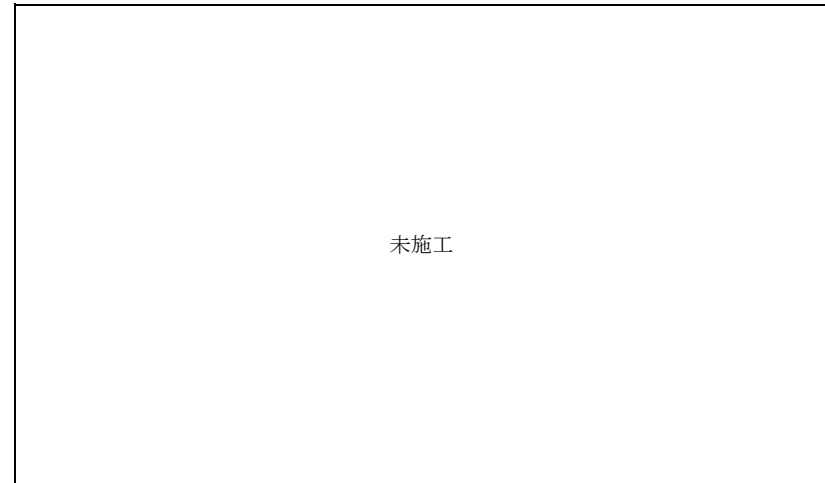
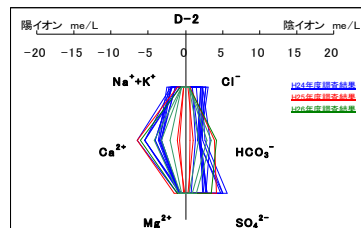
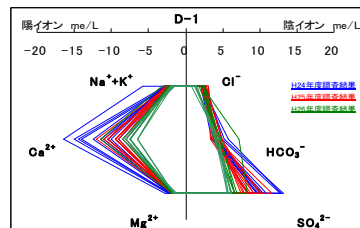
H16～19年度



H20～23年度

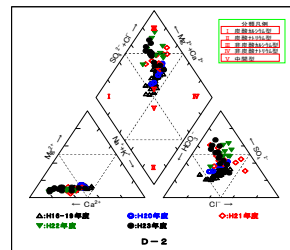
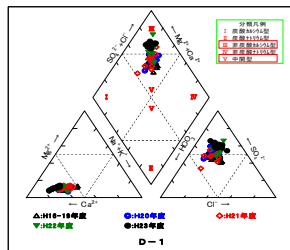


H24～26年度

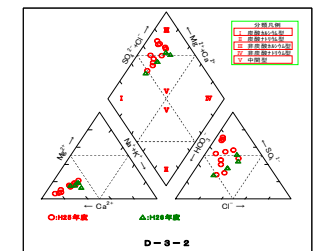
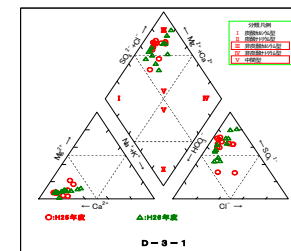
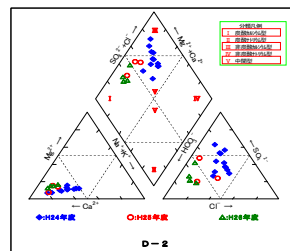
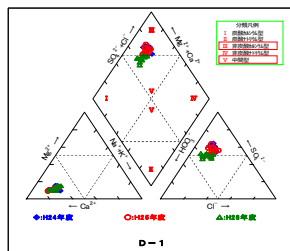


トリニアダイアグラム

H16～23年度

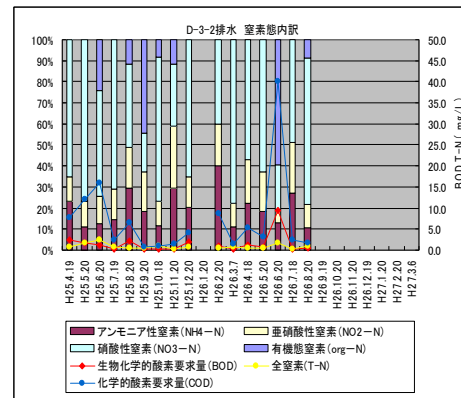
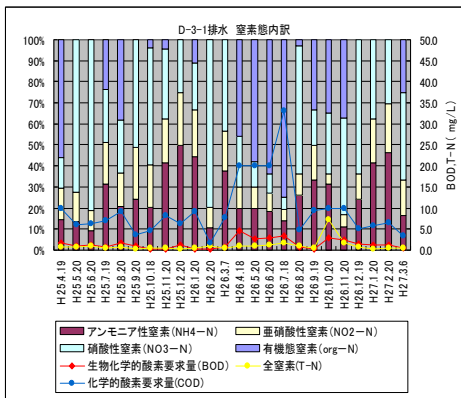
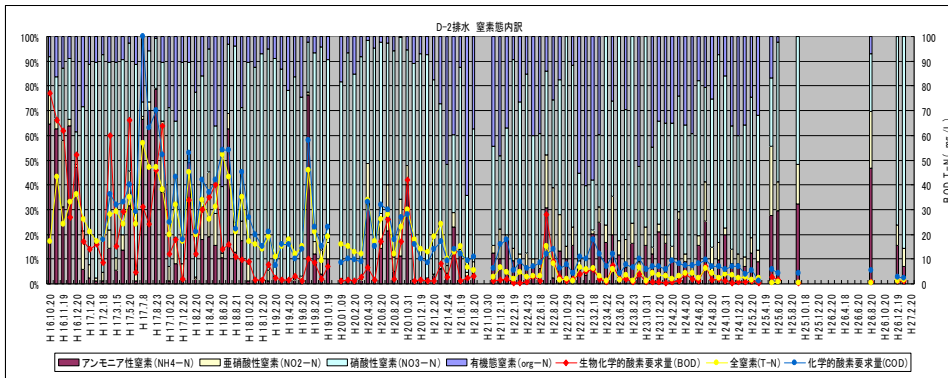
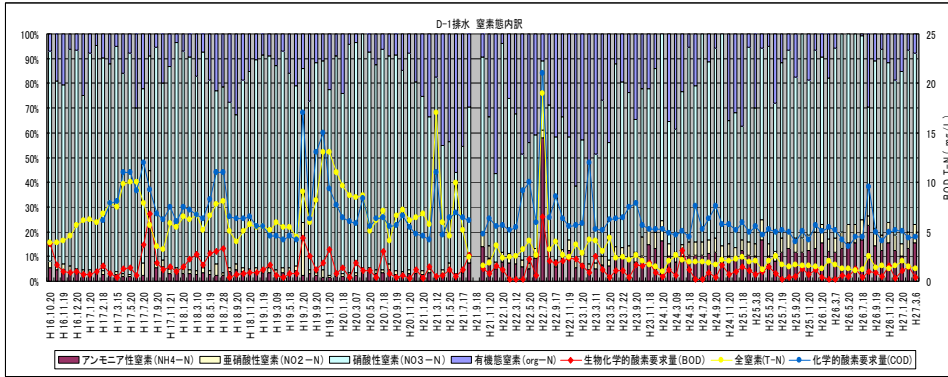


H24～26年度



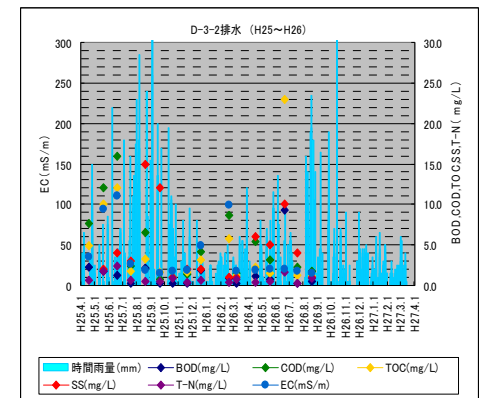
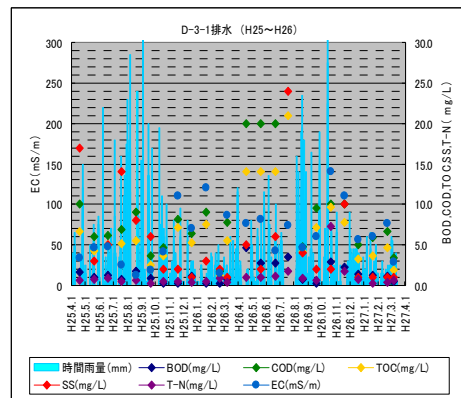
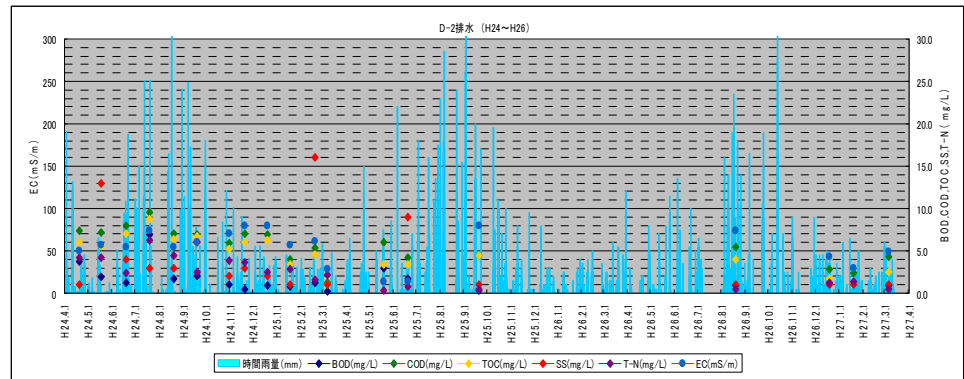
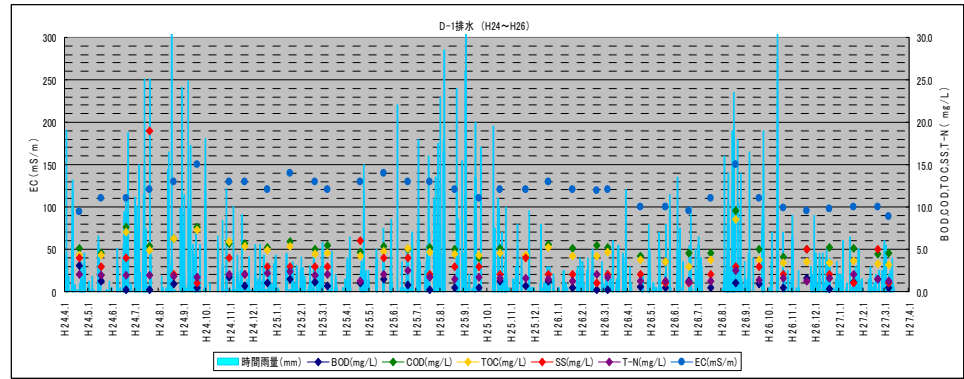
⑧窒素態内訳

D-1は、アンモニア性窒素がH25年度以降若干の上昇傾向が見られるが、上昇が継続するような状況は見られない。
 D-2は、当初アンモニア性窒素濃度が高い割合となっていたが、H21~24年度は全体的に低い割合で推移し、H25年度以降はH21~24年度と比較して高めの割合であった。
 D-2及びD-3-1、D-3-2のT-N濃度は低濃度であることから、これらの窒素態内訳は僅かな内訳のバランスによってばらつきがみられると考えられ、その内訳のバランスは、流量に左右され、流量が少ない中では低濃度のT-N濃度でも大きく変化すると推察される。
 また、排水D-3-1、D-3-2は、H26年4月~7月にかけて、pH、BOD、COD等に変動が見られた。
 これは、水路内の藻類による光合成や、植物由来の有機物の溶出によるものと考えられ、その後の濃度に上昇傾向は見られないことから、植物の生育旺盛な高温期特有の現象と考えられる。



⑨降雨量と分析数値の相関性

降雨量(時間降雨量)と各分析数値の相関について、時間降雨量・定期サンプリング時の数値をH24年度より下記グラフに示す。
 対象とする分析項目は、BOD、EC、SS、TOC、T-N、COD とする。
 降雨量と共に特に変動を示しているのは、COD、TOC、SS、T-N、ECである。
 SSは、降雨時の表面水の流下により、降雨直後は、比較的高い数値を示すが、降雨時とサンプリング時が一致していないため、その相関は確認できない。



4.河川底質

■ 含有量基準項目

実施した項目は、比較参考とした土壤汚染対策法の土壤含有量基準に全て適合していた。
鉛、砒素、ふっ素以外の項目は定量下限値未満であった。
ダイオキシン類も底質の環境基準値150pg-TEQ/gを大きく下回る結果であった。
周辺への影響は特にないと考えられる。

5.土壌

■ 含有量基準項目

平成27年1月に実施したダイオキシン類の分析結果は、調査指針値250pg-TEQ/gを下回る結果であった。

6.大 気

■ 大気環境

平成20年度から、調査地点 A-3での測定を実施している。
ダイオキシン類は、環境基準に適合していた。

■ 周辺データとの比較

本調査結果と岐阜市内の大気汚染常時監視測定局データを用い比較を実施した。
調査地点A-3は、周辺近隣測定局の1/2～1/3程度の濃度であった。

資料種別		大気				
調査地点名称		A-3				
調査時期		春季調査	夏季調査	秋季調査	冬季調査	平均値
資料採取年月日	ダイオキシン類	H26.5.27～5.28	H26.7.14～7.15	H26.10.14～10.15	H27.1.13～1.14	-
		24時間測定				
椿洞(A-3)	ダイオキシン類(pg-TEQ/m3)	0.0067	0.0077	0.0140	0.0072	0.0089

資料種別		大気				
調査地点名称		近隣測定局				
調査時期		春季調査	夏季調査	秋季調査	冬季調査	平均値
資料採取年月日	ダイオキシン類	H26.5.23～5.30	H26.7.10～7.17	H26.10.14～10.21	H27.1.13～1.20	-
		7日間測定				
岐阜北部	ダイオキシン類(pg-TEQ/m3)	0.0190	0.0120	0.0095	0.0200	0.0151
岐阜中央		0.0350	0.0490	0.0200	0.0150	0.0298